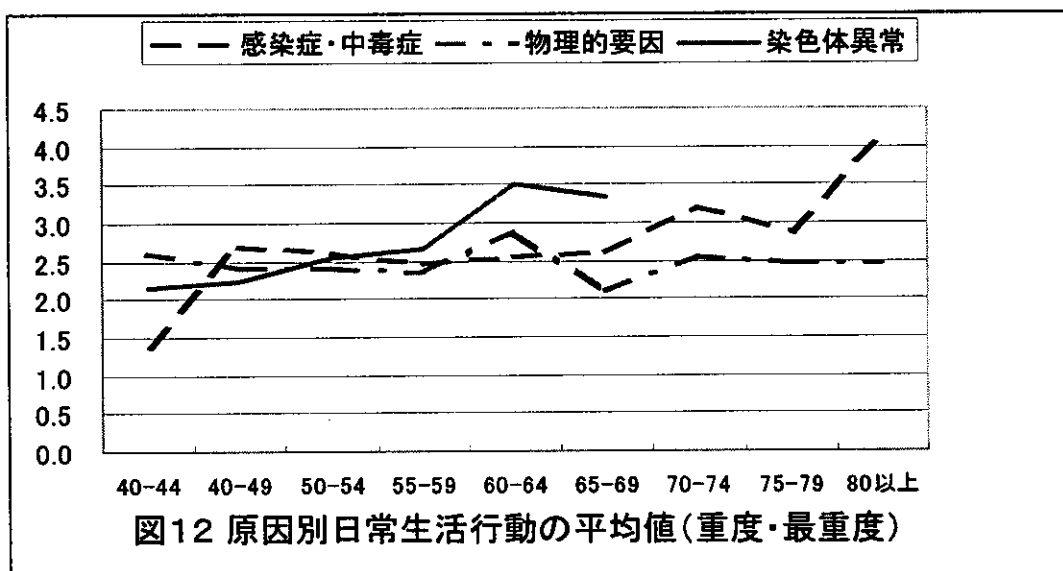


言語明瞭度、服薬管理の 10 項目を [自立 1 点、ほぼ自立 2 点、一部介助 3 点、要介助 4 点、全介助 5 点] と 5 段階に点数化し、知的障害原因との関連について分析を行った。日常生活行動 10 項目の平均値が原因分類を要因としたものとなっているかどうかを検定したが、若干の有意差がみられたものの年齢や障害程度に左右される面が多い。そこで、障害程度を一定にし、各年齢階層（5 歳区分）別、原因分類別に生活行動 10 項目の平均値の傾向を把握するように試みた。その中でデータ数にまとまりがあり、特徴的な傾向を示した重度・最重度知的障害で、かつ「感染症または中毒症に起因するもの」と「染色体異常を伴うもの」「外傷または物理的要因によるもの」をグラフ化したものが図 12 である。「感染症、中毒症」については、45 歳から 49 歳にかけてと 70～74 歳以降に介護程度が大きく増大しているし、「染色体異常」は、60 歳から 64 歳にかけて急激なカーブを描いている。反面、「外傷、物理的な要因」はほとんど変化をみせていない。



7. 知的障害の原因と加齢による変化との関連

毎日の生活をみて「としをとった」という変化がみられるかどうかを知的障害の原因別にみてみた。図 13 は、65 歳以上の主対象群についてのグラフであるが、どの原因をとってみても有意な差はみられない。しかし、65 歳未満（図 14）の場合は、「染色体異常」に変化が強くあらわれており、反面「物理的要因」では変化無しが極めて多い。このことは、「染色体異常」を原因とする知的障害者の「としをとった」という変化が他の原因の知的障害者より早期に目に見えるかたちで現れると考えられる。

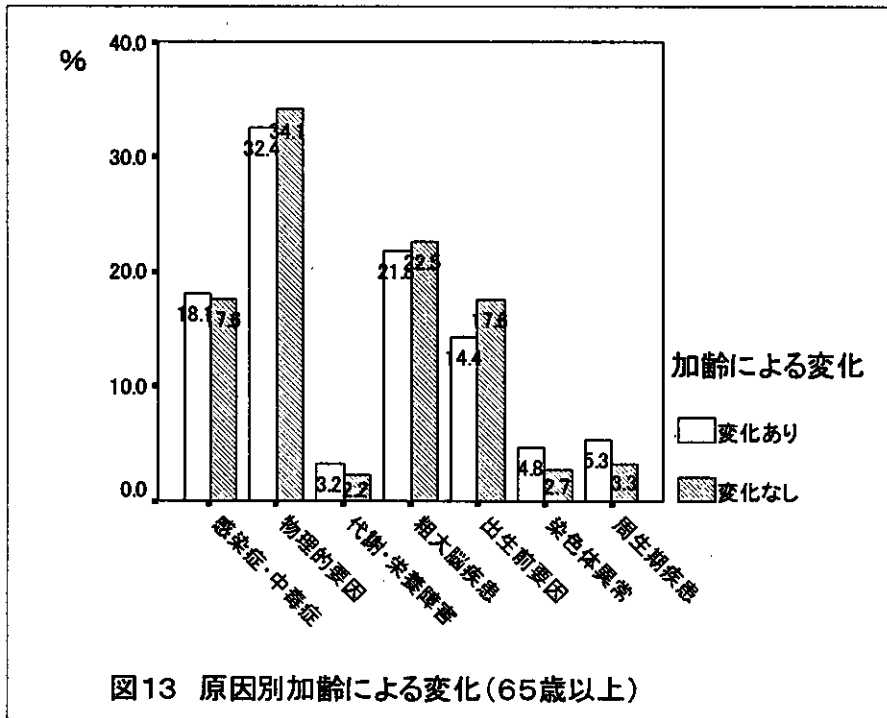


図13 原因別加齢による変化(65歳以上)

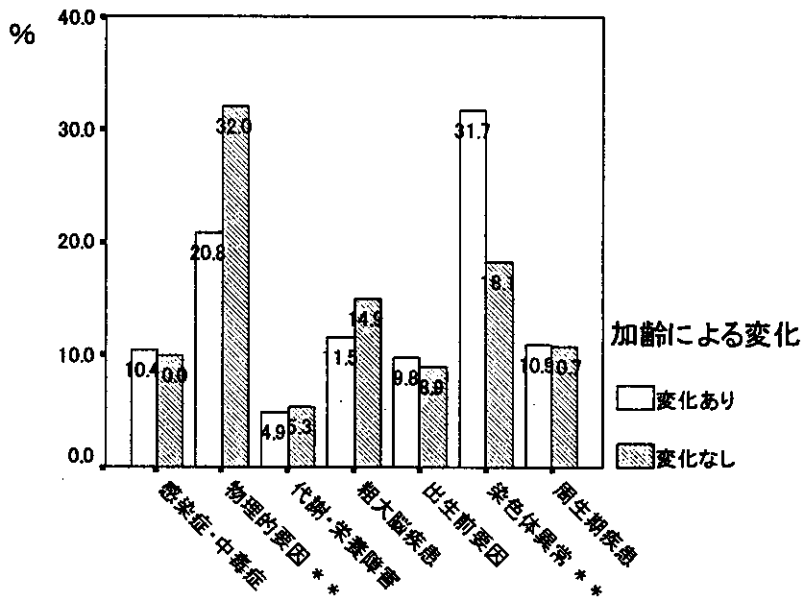


図14 原因別加齢による変化(65歳未満)

8. 知的障害の原因と健康状態との関連

健康状態については、①この1年病気無し、②時に風邪をひく程度、③時折医師にかかる、④定期で診察を受けている、⑤寝たり起きたりの状態、⑥寝たきり、の6つのカテゴリに区分し、回答を求めた。その結果を知的障害者の原因別に違いがあるかどうかを分析したが、65歳以上の主対象群においても、65歳未満の比較対象群においても、ともに関連を見いだすことができなかった。

V. 生活環境について

1. 居住環境

老人施設と更生施設を利用して生活している利用者の居住関係についてみると、4人部屋を利用して生活している人が1286名（約44%）で、ついで2人部屋を利用して生活している人が833名（28%）であった。更生施設、老人施設ともに4人部屋を利用して生活している人が多く、障害程度別に見ても40%以上の人が4人部屋を利用していると言う結果が得られた。

65歳未満と、65歳を越える達の居住環境を比較して見ると、大きな差異は見られないが、65歳を越える人たちの中には65歳未満の人と比較すると、一部屋を5人以上で利用している人が多く、逆に65歳未満の人たちは3人部屋を利用している人たちの多いことがわかった。（表17参照）

居室の人数と意思表示の関係についてみると全体傾向としては70.5%の人が通常もしくは簡単な会話が可能であり、居室の人数で見ると1～2人部屋の人は76%以上の人が会話可能であり、3人部屋以上を利用している人たちは60%台の人たちが会話可能であることがわかった。

会話の難しい人は3人部屋の利用者で19.1%、5人以上の部屋利用者で21%と、利用者の20%弱が会話の難しい人たちが生活していることがわかった。

表16 居室の人数と施設種別のクロス表

		施設種別		合計	
		特別養護老人ホーム	知的障害者更生施設		
居室 の 人 数	一人	度数	57	214	271
		%	21.0%	79.0%	100.0%
	二人	度数	96	737	833
		%	11.5%	88.5%	100.0%
	三人	度数	30	358	388
		%	7.7%	92.3%	100.0%
	四人	度数	423	863	1286
		%	32.9%	67.1%	100.0%
	五人 以上	度数	102	45	147
		%	69.4%	30.6%	100.0%
合計	度数	708	2217	2925	
	%	24.2%	75.8%	100.0%	

表17 居室の人数 と 年齢階層のクロス表

		年 齢 階 層		合計	
		65歳未満	65歳以上		
居室 の 人 数	一人	度数	147	124	271
		%	54.2%	45.8%	100.0%
	二人	度数	439	394	833
		%	52.7%	47.3%	100.0%
	三人	度数	234	164	388
		%	60.3%	39.7%	100.0%
	四人	度数	606	680	1286
		%	47.1%	52.9%	100.0%
	五人 以上	度数	34	113	147
		%	23.1%	76.9%	100.0%
	合計	度数	1460	1465	2925
		%	6.6%	10.3%	100.0%

表18 居室の人数 と 会話理解・意思表示のクロス表

		会 話 理 解 ・ 意 思 表 示					合計	
		通常の会 話可能	簡単な会 話可能	簡単な会話ど うにか可能	ほとんど できない	全くでき ない		
居室 の 人 数	一人	度数	97	112	29	15	17	270
		%	35.9%	41.5%	10.7%	5.6%	6.3%	100.0%
	二人	度数	257	383	103	44	45	832
		%	30.9%	46.0%	12.4%	5.3%	5.4%	100.0%
	三人	度数	83	169	62	27	47	388
		%	21.4%	43.6%	16.0%	7.0%	12.1%	100.0%
	四人	度数	306	565	230	95	90	1286
		%	23.8%	43.9%	17.9%	7.4%	7.0%	100.0%
	五人 以上	度数	25	64	27	18	13	147
		%	17.0%	43.5%	18.4%	12.2%	8.8%	100.0%
	合計	度数	768	1293	451	199	212	2923
		%	26.3%	44.2%	15.4%	6.8%	7.3%	100.0%

2. 周りの人たちとの関係

周囲の人たちとの関係についてみると「皆と仲良く生活している」、「大体うまくやっている」と言う人は老人ホームでは42.5%、更生施設では62.6%であった。一方、「ほとんど孤立」、もしくは「全く孤立している」人たちは老人ホームの42.7%、更生施設24.9%であった。

更生施設では同じ施設を利用し生活している人たちと大体うまく生活している利用者が多く、孤立気味の人たちは少ないが、老人ホームで生活している人たちは同じホームで生活している人たちとは大体うまく生活している利用者、孤立気味の人たちがほぼ同数存在していることがわかった。

障害程度との関係を見ると中軽度者の場合「皆と仲良く」「大体うまく」関係を作れている人が69.1%、重度者の場合68.2%と同じような傾向が見られた。「ほとんど孤立」もしくは「全く孤立」している人は重度者で35.7%、中軽度者で17.9%で

あった。(表 20 参照)

表19 周囲の人達との関係 と 施設種別のクロス表

			施設種別		合計
			特別養護老人ホーム	知的障害者更生施設	
周囲 の 人 達 と の 関 係	皆と仲良く	度数	93	408	501
		周囲の人達との関係の%	18.6%	81.4%	100.0%
		施設種別 の %	13.2%	18.4%	17.2%
	大体うまく	度数	207	979	1186
		周囲の人達との関係の%	17.5%	82.5%	100.0%
		施設種別 の %	29.3%	44.2%	40.6%
	あまり うまく	度数	82	259	341
		周囲の人達との関係の%	24.0%	76.0%	100.0%
		施設種別 の %	11.6%	11.7%	11.7%
	ほとんど 孤立	度数	170	418	588
		周囲の人達との関係の%	28.9%	71.1%	100.0%
		施設種別 の %	24.0%	18.9%	20.1%
	全く孤立	度数	132	132	264
		周囲の人達との関係の%	50.0%	50.0%	100.0%
		施設種別 の %	18.7%	6.0%	9.0%
	不明	度数	23	18	41
		周囲の人達との関係の%	56.1%	43.9%	100.0%
		施設種別 の %	3.3%	.8%	1.4%
合計	度数	707	2214	2921	
	周囲の人達との関係の%	24.2%	75.8%	100.0%	
	施設種別 の %	100.0%	100.0%	100.0%	

表20 周囲の人達との関係と知的障害程度 の加減表

			知的障害程度			合計
			中軽度	重度・最重度	不明	
周囲の人達との関係	皆と仲良く	度数	249	242	6	497
		周囲の人達との関係の %	50.1%	48.7%	1.2%	100.0%
		知的障害程度の %	22.6%	14.1%	7.1%	17.1%
大體うまく	大體うまく	度数	513	639	29	1181
		周囲の人達との関係の %	43.4%	54.1%	2.5%	100.0%
		知的障害程度の %	46.5%	37.2%	34.5%	40.7%
あまり	あまり	度数	137	194	8	339
		周囲の人達との関係の %	40.4%	57.2%	2.4%	100.0%
		知的障害程度の %	12.4%	11.3%	9.5%	11.7%
ほとんど	ほとんど	度数	156	411	17	584
		周囲の人達との関係の %	26.7%	70.4%	2.9%	100.0%
		知的障害程度の %	14.1%	24.0%	20.2%	20.1%
全く	全く	度数	42	200	21	263
		周囲の人達との関係の %	16.0%	76.0%	8.0%	100.0%
		知的障害程度の %	3.8%	11.7%	25.0%	9.1%
不明	不明	度数	6	30	3	39
		周囲の人達との関係の %	15.4%	76.9%	7.7%	100.0%
		知的障害程度の %	.5%	1.7%	3.6%	1.3%
合計	合計	度数	1103	1716	84	2903
		周囲の人達との関係の %	38.0%	59.1%	2.9%	100.0%
		知的障害程度の %	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

会話の理解や意思表示力との関係を見ると、通常の会話や簡単な会話が可能な人たちはそれぞれ82%、63%と周りの人たちと大體うまく関係を作ることができることがわかった。一方、会話理解や意思表示のほとんどできない人や、全くできない人たちはほとんど孤立(66.8%)、もしくは全く孤立(67%)してしまうという傾向があり、周りの人たちとの関係を維持するには会話理解や意思表示力との関係の強いことが推測される。

3 日中活動への参加

老人ホームや更生施設では様々日中活動の取り組みが行われているが、そうした取り組みの中からクラブ活動や行事、作業への参加などについて調査した。

(1) クラブ活動への参加

クラブ活動は多くの施設で実施されている取り組みであるが、今回の調査では老人ホームも更生施設も半数以上の人々がクラブ活動に参加していることがわかった。(表22) 障害程度別に見ると中軽度者が57.6%で、重度者の50.6%を若干上回った。(表23)

クラブ活動の参加と「会話理解・意思表示」との関係について見ると参加者の多くは「通常の会話」や「簡単な会話が可能」人たちであったが、不参加者を見ると「通常の会話」や「簡単な会話が可能」人たちが514名(57%)であり、クラブ活動の参加をするか否かを選択するうえで、「会話理解・意思表示」が強く関係していることがわかった。(表24)

クラブ活動へ継続して参加してゆくうえでは、「会話理解・意思表示」が強く関係していることがわかった。(表-10)

表21 周囲の人達との関係 と 会話理解・意思表示のクロス表

		会話理解・意思表示					合計	
		通常の会話可能	簡単な会話可能	簡単な会話どうにか可能	ほとんどできない	全くできない		
周囲の人達との関係	皆と仲良く	度数	201	219	44	17	20	501
		周囲の人達との関係の%	40.1%	43.7%	8.8%	3.4%	4.0%	100.0%
		会話理解・意思表示の%	26.2%	17.0%	9.8%	8.5%	9.4%	17.2%
	大まうく	度数	430	596	105	32	22	1185
		周囲の人達との関係の%	36.3%	50.3%	8.9%	2.7%	1.9%	100.0%
		会話理解・意思表示の%	56.0%	46.2%	23.3%	16.1%	10.4%	40.6%
	あまのりまく	度数	81	191	55	7	7	341
		周囲の人達との関係の%	23.8%	56.0%	16.1%	2.1%	2.1%	100.0%
		会話理解・意思表示の%	10.5%	14.8%	12.2%	3.5%	3.3%	11.7%
	ほとんどの孤立	度数	50	244	168	74	52	588
		周囲の人達との関係の%	8.5%	41.5%	28.6%	12.6%	8.8%	100.0%
		会話理解・意思表示の%	6.5%	18.9%	37.3%	37.2%	24.5%	20.1%
	全く孤立	度数	6	36	73	59	90	264
		周囲の人達との関係の%	2.3%	13.6%	27.7%	22.3%	34.1%	100.0%
		会話理解・意思表示の%	.8%	2.8%	16.2%	29.6%	42.5%	9.0%
	不明	度数		4	6	10	21	41
		周囲の人達との関係の%		9.8%	14.6%	24.4%	51.2%	100.0%
		会話理解・意思表示の%		.3%	1.3%	5.0%	9.9%	1.4%
合計	度数	768	1290	451	199	212	2920	
	周囲の人達との関係の%	26.3%	44.2%	15.4%	6.8%	7.3%	100.0%	
	会話理解・意思表示の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

表22 クラブ活動への参加 と 施設種別

		施設種別		合計	
		特別養護老人ホーム	知的障害者更生施設		
クラブ活動への参加	参加	度数	367	1166	1533
		クラブ活動への参加の%	23.9%	76.1%	100.0%
		施設種別の%	52.7%	53.3%	53.2%
	不参加	度数	284	619	903
		クラブ活動への参加の%	31.5%	68.5%	100.0%
		施設種別の%	40.7%	28.3%	31.3%
	非該当	度数	46	402	448
		クラブ活動への参加の%	10.3%	89.7%	100.0%
		施設種別の%	6.6%	18.4%	15.5%
合計	度数	697	2187	2884	
	クラブ活動への参加の%	24.2%	75.8%	100.0%	
	施設種別の%	100.0%	100.0%	100.0%	

表23 クラブ活動への参加 と 知的障害程度 の加減表

			知的障害程度			合計
			中軽度	重度・最重度	不明	
クラブ活動への参加	参加	度数	625	859	44	1528
		クラブ活動への参加の %	40.9%	56.2%	2.9%	100.0%
		知的障害程度 の %	57.6%	50.6%	53.7%	53.3%
	不参加	度数	299	572	23	894
		クラブ活動への参加の %	33.4%	64.0%	2.6%	100.0%
		知的障害程度 の %	27.6%	33.7%	28.0%	31.2%
	非該当	度数	161	268	15	444
		クラブ活動への参加の %	36.3%	60.4%	3.4%	100.0%
		知的障害程度 の %	14.8%	15.8%	18.3%	15.5%
合計		度数	1085	1699	82	2866
		クラブ活動への参加の %	37.9%	59.3%	2.9%	100.0%
		知的障害程度 の %	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表24 クラブ活動への参加 と 会話理解・意思表示

			会話理解・意思表示					合計	
			通常の会話可能	簡単な会話可能	簡単な会話どうにか可能	ほとんどできない	全くできない		
クラブ活動への参加	参加	度数	468	741	187	69	67	1532	
		%	30.5%	48.4%	12.2%	4.5%	4.4%	100.0%	
	不参加	度数	158	356	193	91	104	902	
		%	17.5%	39.5%	21.4%	10.1%	11.5%	100.0%	
	非該当	度数	132	175	67	39	35	448	
		%	29.5%	39.1%	15.0%	8.7%	7.8%	100.0%	
	合計		度数	758	1272	447	199	206	2882
			%	26.3%	44.1%	15.5%	6.9%	7.1%	100.0%

表25 クラブ活動への参加程度 と 会話理解・意思表示

			会話理解・意思表示					合計	
			通常の会話可能	簡単な会話可能	簡単な会話どうか可能	ほとんどできない	全くできない		
クラブ活動への参加程度	必ず参加	度数	328	378	76	26	27	835	
		%	39.3%	45.3%	9.1%	3.1%	3.2%	100.0%	
	よく参加	度数	102	250	58	25	23	458	
		%	22.3%	54.6%	12.7%	5.5%	5.0%	100.0%	
	時々参加	度数	35	98	49	13	9	204	
		%	17.2%	48.0%	24.0%	6.4%	4.4%	100.0%	
	あまり参加しない	度数	12	29	12	6	4	63	
		%	19.0%	46.0%	19.0%	9.5%	6.3%	100.0%	
	参加程度不明	度数		1	1		3	5	
		%		20.0%	20.0%		60.0%	100.0%	
	合計		度数	477	756	196	70	66	1565
			%	30.5%	48.3%	12.5%	4.5%	4.2%	100.0%

クラブ活動への年齢階層別の参加状況を見ると65歳未満の人たちの方が若干参加者が多く、65歳以上の人たちの方が不参加者が多いという傾向が見られた。(表26)

クラブ活動への参加状況を見ると「必ず参加」する人は835名、「良く参加」する人は459名で、クラブ活動参加者の82.6%が積極的に活動に参加していることがわかった。(表27)。

表26 クラブ活動への参加 と 年齢階層

			年 齢 階 層		合計
			65歳未満	65歳以上	
クラブ活動への参加	参加	度数	808	725	1533
		%	52.7%	47.3%	100.0%
	不参加	度数	390	513	903
		%	43.2%	56.6%	100.0%
	非該当	度数	248	200	448
		%	55.4%	44.6%	100.0%
合計		度数	1446	1438	2884
		%	50.1%	49.9%	100.0%

表27 クラブ活動への参加程度 と 年齢階層

			年 齢 階 層		合計	
			65歳未満	65歳以上		
クラブ活動への参加程度	必ず参加	度数	504	331	835	
		%	60.4%	39.6%	100.0%	
	よく参加	度数	203	256	459	
		%	44.2%	55.8%	100.0%	
	時々参加	度数	82	122	204	
		%	40.2%	59.8%	100.0%	
	あまり参加しない	度数	31	32	63	
		%	49.2%	50.8%	100.0%	
	参加程度不明	度数	2	3	5	
		%	40.0%	60.0%	100.0%	
	合計		度数	822	744	1566
			%	7.7%	10.7%	100.0%

具体的にどのような内容の取り組みが実施されているかについてみると、音楽的な活動や散歩、美術工芸的活動などについての取り組みは比較的多く見られた。一方、文芸的活動や演劇的活動、園芸・飼育活動、野外活動などについての取り組みは少ないことがわかった。(表28)

実施されている各クラブ活動への年齢別の参加状況を見ると、それぞれの活動が65歳～69歳の年代を中心に展開されていることがわかった。参加者の最も多い「音楽的活動」についてみると図-3 に示すような結果が得られた。

表28 施設種別とクラブ活動の種類と参加者のクロス表

		施設種別		合計
		特別養護老人ホーム	知的障害者更生施設	
音楽的活動	度数	213	348	561
	%	38.0%	62.0%	100.0%
舞踊的活動	度数	25	105	130
	%	19.2%	80.8%	100.0%
美術工芸的活動	度数	109	268	377
	%	28.9%	71.1%	100.0%
文芸的活動	度数	0	18	18
	%		100.0%	100.0%
演劇的活動	度数	3	6	9
	%	33.3%	66.7%	100.0%
スポーツ的活動	度数	61	221	282
	%	21.6%	78.4%	100.0%
園芸・飼育的活動	度数	20	68	88
	%	22.7%	77.3%	100.0%
野外活動	度数	18	55	73
	%	24.7%	75.3%	100.0%
散歩	度数	141	352	493
	%	28.6%	71.4%	100.0%
その他	度数	86	201	287
	%	30.0%	70.0%	100.0%

(2) 行事への参加

各種の行事活動への参加についてみると、「必ず参加」、「良く参加する」人の割合は77.2%で7割を超える人が行事へ参加していることがわかった。「時々参加」や、「余り参加しない」と言う消極的な参加は22.1%であった。施設の種別で見ると老人ホームでは63.8%、更生施設では83.5%が積極的に参加しており、老人ホームの35.4%、更生施設の17.9%が消極的な参加者であった。(表29)

障害程度別に見ると中軽度者の場合積極的な参加者は84.1%、重度者の場合73.6%と中軽度者の方が積極的参加者の多い傾向のあることがわかった。(表30)

表29 行事参加 と 施設種別のクロス表

		施設種別				合計		
		特別養護老人ホーム		知的障害者更生施設				
行事参加	必ず参加	度数	263		1177		1440	
		%	18.3%	37.4%	81.7%	53.2%	100.0%	49.3%
	よく参加	度数	186		627		813	
		%	22.9%	26.4%	77.1%	28.3%	100.0%	27.9%
	時々参加	度数	117		272		389	
		%	30.1%	16.6%	69.9%	12.3%	100.0%	13.3%
	あまり参加しない	度数	132		124		256	
		%	51.6%	18.8%	48.4%	5.6%	100.0%	8.8%
	参加程度不明	度数	6		14		20	
		%	30.0%	0.9%	70.0%	0.6%	100.0%	0.7%
	合計		度数	704		2214		2918
			%	24.1%	100%	75.9%	100%	100.0%

表30 行事参加 と 知的障害程度のクロス表

		知的障害程度			合計	
		中軽度	重度・最重度	不明		
行事参加	必ず参加	度数	593	807	34	1434
		行事参加の%	41.4%	56.3%	2.4%	100.0%
		知的障害程度の%	53.8%	47.1%	40.5%	49.4%
	よく参加	度数	334	454	19	807
		行事参加の%	41.4%	56.3%	2.4%	100.0%
		知的障害程度の%	30.3%	26.5%	22.6%	27.8%
	時々参加	度数	117	261	9	387
		行事参加の%	30.2%	67.4%	2.3%	100.0%
		知的障害程度の%	10.6%	15.2%	10.7%	13.3%
	あまり参加しない	度数	57	174	22	253
		行事参加の%	22.5%	68.8%	8.7%	100.0%
		知的障害程度の%	5.2%	10.2%	26.2%	8.7%
参加程度不明	度数	1	18		19	
	行事参加の%	5.3%	94.7%		100.0%	
	知的障害程度の%	.1%	1.1%		.7%	
合計		度数	1102	1714	84	2900
		行事参加の%	38.0%	59.1%	2.9%	100.0%
		知的障害程度の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

行事への参加と会話理解・意思表示力との関係について見ると、「通常の会話可能な人」のうち64.4%は行事に必ず参加し、24.5%は良く参加している。「簡単な会話可能な人」たちのうち51.4%は必ず参加し、30.6%は良く参加していることが判明した。会話理解・意思表示力の高い人の多くが行事へ積極的に参加していることがわかった。

行事への参加を年齢階層別に見ると65歳代以下では82.8%以上の方が、65歳以上では71.7%と何れの年代で「必ず」あるいは「良く」参加しており、高い割合で行事へ積極的に参加している姿が判明した。

(3) 作業活動への参加

クラブ活動や行事と並んで実施されている施設での日中活動として作業活動がある。

作業活動については様々形態の想定が可能であるが、調査では厳密な意味での作業活動だけではなく、「作業と意識して施設内で実施されている活動」への参加を含めて調査を行った。

調査の結果、作業活動に参加している人は老人ホームでは23.9%、更生施設では77.4%、不参加者は老人ホームで41.9%、更生施設では16.9%であった。また、作業活動を実施していない施設で生活している人は老人ホームで34.2%、更生施設で5.7%であった。(表31)

障害程度別に見ると作業への参加者は中軽度者72.2%、重度者61.8%と、中軽度者の方が作業への参加者の割合の高いことがわかった。(表32)

表31 作業活動への参加と施設種別の対比表

			施設種別		合計
			特別養護老人ホーム	知的障害者更生施設	
作業活動	参加	度数	163	1702	1865
		作業活動の%	8.7%	91.3%	100.0%
		施設種別の%	23.9%	77.4%	64.8%
	不参加	度数	286	371	657
		作業活動の%	43.5%	56.5%	100.0%
		施設種別の%	41.9%	16.9%	22.8%
	非該当	度数	233	125	358
		作業活動の%	65.1%	34.9%	100.0%
		施設種別の%	34.2%	5.7%	12.4%
合計		度数	682	2198	2880
		作業活動の%	23.7%	76.3%	100.0%
		施設種別の%	100.0%	100.0%	100.0%

表32 作業活動と知的障害程度 のクロス表

		知的障害程度			合計	
		中軽度	重度・最重度	不明		
作業活動	参加	度数	782	1048	23	1853
		作業活動の%	42.2%	56.6%	1.2%	100.0%
		知的障害程度の%	72.2%	61.8%	27.7%	64.7%
	不参加	度数	184	433	35	652
		作業活動の%	28.2%	66.4%	5.4%	100.0%
		知的障害程度の%	17.0%	25.5%	42.2%	22.8%
	非該当	度数	117	215	25	357
		作業活動の%	32.8%	60.2%	7.0%	100.0%
		知的障害程度の%	10.8%	12.7%	30.1%	12.5%
合計	度数	1083	1696	83	2862	
	作業活動の%	37.8%	59.3%	2.9%	100.0%	
	知的障害程度の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

次に年齢階層別に見ると、作業活動に参加している人は65歳未満では77%を超える人たちが作業活動に参加しており、65歳以上でも52.3%の人が作業活動に参加していることがわかった。一方、作業活動に参加していない65歳未満では17.1%であるが、65歳を越えると28.6%を超え、年齢が高くなるに従い作業活動に参加していない人が増加している傾向が判明した。(表33)

表33 作業活動と年齢階層のクロス表

		年齢階層		合計	
		65歳未満	65歳以上		
作業活動	参加	度数	1116	749	1865
		作業活動の%	59.6%	40.2%	100.0%
		年齢階層の%	77.1%	52.3%	64.8%
	不参加	度数	248	409	657
		作業活動の%	23.5%	62.3%	100.0%
		年齢階層の%	17.1%	28.6%	22.8%
	非該当	度数	84	274	358
		作業活動の%	23.5%	76.5%	100.0%
		年齢階層の%	5.8%	19.1%	12.4%
合計	度数	1448	1432	2880	
	作業活動の%	50.3%	49.7%	100.0%	
	年齢階層の%	100.0%	100.0%	100.0%	

作業参加への参加状況を見ると老人ホームでは必ず参加する人が51.5%、良く参加する人が33.7%と、積極的な参加者が85.2%、更生施設では61.5%の人が必ず参加、26.8%の人が良く参加と、積極的な参加者が88.3%とともに高い割合を示した。(表34)

作業活動と会話理解・意思表示との関係についてみると、作業参加者の80.9%は「通常の会話可能」もしくは「簡単な会話可能」者であった。作業への参加状況を見ると通常

の会話可能者の73.4%は必ず作業に参加し、19.1%は良く参加するという結果が得られた。(表35)

表34 作業への参加程度と施設種別との関係

		施設種別		合計	
		特別養護老人ホーム	知的障害者更生施設		
作業への参加程度	必ず参加	度数	84	1055	1139
		作業への参加程度の%	7.4%	92.6%	100.0%
		施設種別の%	51.5%	61.5%	60.6%
	よく参加	度数	55	459	514
		作業への参加程度の%	10.7%	89.3%	100.0%
		施設種別の%	33.7%	26.8%	27.4%
	時々参加	度数	23	134	157
		作業への参加程度の%	14.6%	85.4%	100.0%
		施設種別の%	14.1%	7.8%	8.4%
	あまり参加しない	度数	1	62	63
		作業への参加程度の%	1.6%	98.4%	100.0%
		施設種別の%	.6%	3.6%	3.4%
	参加程度不明	度数		5	5
		作業への参加程度の%		100.0%	100.0%
		施設種別の%		.3%	.3%
合計	度数	163	1715	1878	
	作業への参加程度の%	8.7%	91.3%	100.0%	
	施設種別の%	100.0%	100.0%	100.0%	

表35 作業活動と会話理解・意思表示の対比表

		会話理解・意思表示					合計	
		通常の会話可能	簡単な会話可能	簡単な会話どうにか可能	ほとんどできない	全くできない		
作業活動	参加	度数	628	880	226	73	57	1864
		作業活動の%	33.7%	47.2%	12.1%	3.9%	3.1%	100.0%
		会話理解・意思表示の%	83.2%	69.1%	51.0%	36.9%	27.4%	64.8%
	不参加	度数	68	246	160	79	103	656
		作業活動の%	10.4%	37.5%	24.4%	12.0%	15.7%	100.0%
		会話理解・意思表示の%	9.0%	19.3%	36.1%	39.9%	49.5%	22.8%
	該当	度数	59	148	57	46	48	358
		作業活動の%	16.5%	41.3%	15.9%	12.8%	13.4%	100.0%
		会話理解・意思表示の%	7.8%	11.6%	12.9%	23.2%	23.1%	12.4%
合計	度数	755	1274	443	198	208	2878	
	作業活動の%	26.2%	44.3%	15.4%	6.9%	7.2%	100.0%	
	会話理解・意思表示の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

VI. 毎日の健康や身体の状態について

高齢知的障害者の加齢による変化、毎日の健康状態、この1年間にかかった病気や今も治療を続けている病気の有無、身体障害者手帳の所持の有無、知的障害以外の障害の有無、などについて年齢階層別に分析し、検討を行う。

1. 方法

(1) 加齢による変化については、「1. 変化が見られる」「2. 変化が見られない」「9. わからない」の3つのうちから該当する番号を1つ選択してもらった。加齢による変化と年齢階層3段階のクロス表を算出し、 χ^2 乗検定を行った。さらに、どのような変化であるかについても質問した。

(2) 毎日の健康については、「1. 元気でこの一年病気らしい病気はない」「2. ときに風部をひく程度」「3. やや病弱で、風邪や季節の変わりめの神経痛などで、時折医師にかかっている」「4. 定期的に診断を受け、服薬をしている」「5. 寝たり、起きたりで介助を受けている」「6. 殆ど寝たきりである」の6つのうちで該当する番号を1つ選択してもらった。この毎日の健康と年齢階層3段階のクロス表を算出し、 χ^2 乗検定を行った。

(3) この1年間にかかった病気や今も治療を続けている病気の有無について、「1. 治療を受けた病気がある」「2. 病気はない」「9. わからない」の3つのうちから該当する番号を1つ選択してもらった。病気や今も治療を続けている病気の有無と年齢階層3段階別のクロス表を算出し、 χ^2 乗検定を行った。治療を受けた病気がある場合には、その疾病名を記入してもらった。疾病名に関して、2931名のうち2%以上の人に認められたものについて、年齢階層別にその割合を算出した。

(4) 身体障害者手帳所持の有無について、「1. 身体障害者手帳を持っている」「2. 身体障害者手帳はもっていないが、明らかな障害がある」「3. 障害はない」「9. わからない」の4つのうちから該当する番号を選んでもらった。身体障害者手帳所持の有無と年齢階層3段階別のクロス表を算出し、 χ^2 乗検定を行った。さらに、知的障害以外の障害の有無などについても尋ねた。

なお、ここでの分析においては、 χ^2 乗検定を行うと同時に、残差分析をも実施した。そして、有意差が認められた場合にのみ、残差分析の結果に注目した。 χ^2 乗検定において有意差が認められなかった場合には、残差分析の結果は無視した。

2. 結果

(1) 加齢による変化

加齢による変化と年齢階層とのクロス表を、表 36 に示した。 χ^2 乗検定の結果、変化と年齢階層との間には有意差が見られた ($P < .01$)。表 1 を見ると、全体的には、変化ありが40%、変化なしが56%であった。変化ありの割合については、残差分析の結果から「40 - 64歳」が有意に少なく、「66 - 74歳」「76歳以上」が有意に多いことがわかる。以上の結果から、加齢による変化は、「65 - 74歳」と「75歳以上」は、「40 - 64歳」に比べて著しいといえる。

次に、加齢による変化の内容と年齢階層とのクロス表を、表 37 に示した。変化の内容ごとに χ^2 乗検定を行った。その結果、多くの内容において有意差が見られた。

全体的に見ると、「01. 食事量減退」「02. 尿の回数増」「03. 元気なし」「04. 物忘れ増える」「11. 興奮しやすい」の5つは、加齢による変化の認められた人の割合が5%を超えており、比較的多く認められた項目だと言える。

χ^2 乗検定の結果に注目しながら年齢階層間の違いを、以下、見ていく。

「01. 食事量減退」「03. 元気なし」「04. 物忘れ増える」「05. 日付を間違える」「07. 昼夜逆転」「09. 昼夜の区別不能」「14. しまい忘れ」については、年齢階層が上がるにつれて、より多くの割合で認められた。特に「75歳以上」においてその割合が高かった。

「02. 尿の回数増」は、「66－74歳」においてその割合が急増し、「75歳以上」でもそれほど変化は見られなかった。

「06. 食事したことを忘れる」は全体でも1.1%と低かったが、年齢階層が上がるにつれてその割合は高くなっている。

「10. 家族職員がわからない」は「75歳以上」になってその割合が高くなっている。

「11. 興奮しやすい」「12. 思い込みがある」は、年齢階層が上がるにつれて、次第にその割合が高くなっていた。

「15. 病気の訴え」は「65－74歳」においてその割合が明らかに高くなり、「75歳以上」になると再び、その割合は減少していた。

「08. 場所間違える」「13. 幻視幻聴」「16. 自傷行為」「18. 常同行為」に関しては、年齢階層間で有意差は認められなかった。

(2) 毎日の健康状態

毎日の健康と年齢階層とのクロス表を、表38に示した。 χ^2 乗検定を行ったところ、有意差が認められた($P < .01$)。次に、残差分析の結果を見て、どのセルが有意な差をもたらしたのかについて検討を行った。その結果、「40－64歳」は「1. 元気でこの一年病気らしい病気はない」が有意に多く、「5. 寝たり、起きたりで介助を受けている」と「6. 殆ど寝たきりである」が有意に少なかった。「65－74歳」は「1. 元気でこの一年病気らしい病気はない」が有意に少なく、「4. 定期的に診断を受け、服薬をしている」が有意に多かった。「75歳以上」は「4. 定期的に診断を受け、服薬をしている」が有意に少なく、「5. 寝たり、起きたりで介助を受けている」と「6. 殆ど寝たきりである」が有意に多かった。

以上の結果から、「1. 元気でこの一年病気らしい病気はない」人が「65－74歳」段階で減少し、また、「4. 定期的に診断を受け、服薬をしている」人が「75歳以上」において減少することが明らかとなった。そして、「5. 寝たり、起きたりで介助を受けている」人や「6. 殆ど寝たきりである」人が年齢階層が上がるにつれて増加することも明らかとなった。

(3) この1年間にかかった病気や今も治療を続けている病気

この1年間にかかった病気や今も治療を続けている病気と年齢階層とのクロス表を、表39に示した。 χ^2 乗検定を行ったところ、有意差が認められた($P < .05$)。残差分析の結果に注目しながら、表39を見ると、病気ありの人が「65－74歳」段階で明らかに増え、その後また減少していることがわかる。

つぎに、治療をうけた疾病名のうち、全体で2%以上の人に認められたものについて、年齢階層とのクロス表を算出し、表40に示した(ただし、「老年痴呆」については、出現頻度は低かったが取り上げた)。

全体的にみて、出現頻度が5%以上と、比較的多くの人に認められた疾病は、「高血圧」、「胃十二指腸潰瘍など」、「下痢便秘症など」、「てんかん」の4項目であった。他方、「老

年痴呆」については、高齢知的障害者においてどの程度認められているのかを検討するために取り上げた。その出現頻度を見ると、「40 - 64 歳」で 0 %、「65 - 74 歳」で 0.38 %、「75 歳以上」で 0.94 % と非常に低かった。

疾病名と年齢階層とのクロス表において有意な差が認められたものに注目して検討する。

年齢階層が上がるにつれて、その出現頻度も高くなっている疾病は、「脳血管障害など」と「胃十二指腸潰瘍など」であった。特に、「脳血管障害など」は、「40 - 64 歳」と「75 歳以上」の差が大きかった。他方、年齢階層が上がるにつれて、その出現頻度が下がっている疾病は、「みずむし、たむし等」「てんかん」であった。

「40 - 64 歳」から「66 - 74 歳」にかけて出現頻度が上がり、「75 歳以上」で再び下がっている疾病は、「高血圧」「糖尿病、耐糖障害など」「下痢便秘症など」「白内障」の 4 つであった。

「虚血性心疾患など」は「40 - 64 歳」から「65 - 74 歳」にかけて出現頻度が上がり、その後横ばいであった。また、「肝炎、肝硬変など」は「40 - 64 歳」から「65 - 74 歳」にかけて出現頻度が下がり、その後横ばいであった。

(4) 身体障害者手帳の所持の有無、知的障害以外の障害の有無

身体障害者手帳の所持の有無と年齢階層とのクロス表を、表 41 に示した。χ² 乗検定の結果、手帳所持と年齢階層との間には有意差が見られた (P < .01)。表 1 の人数の割合、残差分析の結果から、身体障害者手帳を持っている人は「40 - 64 歳」で最も多く、「75 歳以上」で最も少なくなっていることが、他方、身体障害者手帳は持っていないが障害はある、という人は「40 - 64 歳」で最も少なく、「75 歳以上」で最も多くなっていることがわかる。

次に、加齢等によって多く見られる知的障害以外の障害と年齢階層とのクロス表を、表 42 に示した。

全体的に見ると、歩行障害と言語障害は他の障害に比べて出現頻度が高く、20 % を超えていた。次いで、目の障害、麻痺、痙攣発作、耳の障害、嚥下障害は 5 ~ 10 % であった。不随意運動は 3.2 % と低かった。さらに、床ずれは 1 % 未満であった。

以下、障害と年齢階層とのクロス表において有意な差が認められたものに着目して検討していく。

出現頻度が最も高かった歩行障害は「40 - 64 歳」では 20 %、「65 - 74 歳」では 31 %、「75 歳以上」では 49 % と年齢段階が上がるにつれてその頻度は高まった。また、出現頻度が高かった言語障害については、「40 - 64 歳」、「66 - 74 歳」では約 20 %、「76 歳以上」になって 25 % に上がっていた。

嚥下障害、麻痺、耳の障害については、「40 - 64 歳」から「65 - 74 歳」にかけてはその頻度が少し高くなり、その後、「75 歳以上」になると急激に頻度が高まった。

不随意運動は、「40 - 64 歳」から「65 - 74 歳」にかけては 2.1 % から 4.0 % へと高まったが、「76 歳以上」にかけては 4.7 % とそれほど高くはなっていない。

痙攣発作に関しては、年齢段階が上がるにつれて、その頻度は低くなっていた。

以上、40 歳以上の知的障害者の毎日の健康や身体の状態について、年齢階層を「40 - 64 歳」、「65 - 74 歳」、「75 歳以上」の 3 段階に分けて、分析検討した。その結果、加齢による変化は、「65 - 74 歳」と「75 歳以上」は「40 - 64 歳」に比べて明らかに大きかった。変化の主な内容は、食事減退、尿の回数増、物忘れの増加などであった。毎日の健康状態に関しては、寝たり、起きたりして介助を受けている人や殆ど寝たきりである人が年齢段階

が上がるにつれて増加していた。この1年間にかかった病気や今も治療を続けている病気は、「40 - 64 歳」から「65 - 74 歳」にかけて増え、その後「75 歳以上」においてまた減少していた。身体障害者手帳の所持に関しては、手帳を持っている人は「40 - 64 歳」で最も多く、「75 歳以上」で最も少なかった。他方、手帳は持っていないが知的障害以外の障害がある人は「40 - 64 歳」で最も少なく、「75 歳以上」で最も多かった。

表36 加齢による変化と年齢階層とのクロス表

(χ^2 乗定: $P < .01$)

			年齢階層			合 計
			40—64歳	65—74歳	75歳以上	
加齢による 変化	変化あり	人 数	485	467	215	1167
		%	33.20	45.25	51.68	40.12
		調整済残差	-7.65	4.19	5.20	
	変化なし	人 数	914	522	183	1619
		%	62.56	50.58	43.99	55.65
		調整済残差	7.53	-4.08	-5.17	
	不明	人 数	62	43	18	123
		%	4.24	4.17	4.33	4.23
		調整済残差	0.04	-0.12	0.11	
合 計		人 数	1461	1032	416	2909
		%	100.00	100.00	100.00	100.00

注)調整済残差:残差分析により算出した値。セル内の絶対値が1.96以上2.58未満のとき $P < .05$ 、絶対値が2.58以上のとき $P < .01$ 。なお、値が正のときはそのセルの数値が大きいことを、負のときはそのセルの数値が小さいことを意味する。

表37 加齢による変化の内容と年齢階層とのクロス表

			年齢階層			合計	χ ² 乗検定
			40-64歳	65-74歳	75歳以上		
			人数	人数	人数	人数	
01.食事量減退	無	人数	1461	1032	416	2909	P<.01
		%	1366	920	352	2638	
		調整済残差	93.50	89.15	84.62	90.68	
	有	調整済残差	5.24	-2.11	-4.60		
		人数	95	112	64	271	
		%	6.50	10.85	15.38	9.32	
02.尿の回数増	無	調整済残差	-5.24	2.11	4.60		P<.01
		人数	1394	935	372	2701	
		%	94.39	90.60	89.42	92.85	
	有	調整済残差	5.39	-3.49	-2.93		
		人数	67	97	44	208	
		%	4.59	9.40	10.58	7.15	
03.元気なし	無	調整済残差	-5.39	3.49	2.93		P<.01
		人数	1379	946	366	2691	
		%	94.39	91.67	87.98	92.51	
	有	調整済残差	3.87	-1.27	-3.79		
		人数	82	86	50	218	
		%	5.61	8.33	12.02	7.49	
04.物忘れ増える	無	調整済残差	-3.87	1.27	3.79		P<.01
		人数	1398	952	372	2722	
		%	95.69	92.25	89.42	93.57	
	有	調整済残差	4.67	-2.16	-3.73		
		人数	63	80	44	187	
		%	4.31	7.75	10.58	6.43	
05.日付を間違える	無	調整済残差	-4.67	2.16	3.73		P<.01
		人数	1453	1021	401	2875	
		%	99.45	98.93	96.39	98.83	
	有	調整済残差	3.13	0.38	-5.00		
		人数	8	11	15	34	
		%	0.55	1.07	3.61	1.17	
06.食事したことを忘れる	無	調整済残差	-3.13	-0.38	5.00		P<.05
		人数	1452	1016	408	2876	
		%	99.38	98.45	98.08	98.87	
	有	調整済残差	2.65	-1.57	-1.64		
		人数	9	16	8	33	
		%	0.62	1.55	1.92	1.13	
07.昼夜逆転	無	調整済残差	-2.65	1.57	1.64		P<.01
		人数	1441	1012	399	2852	
		%	98.63	98.06	95.91	98.04	
	有	調整済残差	2.31	0.06	-3.38		
		人数	20	20	17	57	
		%	1.37	1.94	4.09	1.96	
08.場所間違える	無	調整済残差	-2.31	-0.06	3.38		n.s.
		人数	1438	1011	407	2856	
		%	98.43	97.97	97.84	98.18	
	有	調整済残差	1.00	-0.64	-0.56		
		人数	23	21	9	53	
		%	1.57	2.03	2.16	1.82	
09.昼夜の区別不能	無	調整済残差	-1.00	0.64	0.56		P<.01
		人数	1449	1020	399	2868	
		%	99.18	98.84	95.91	98.59	
	有	調整済残差	2.70	0.84	-5.00		
		人数	12	12	17	41	
		%	0.82	1.16	4.09	1.41	
10.家族職員がわからない	無	調整済残差	-2.70	-0.84	5.00		P<.01
		人数	1448	1021	404	2873	
		%	99.11	98.93	97.12	98.76	
	有	調整済残差	1.70	0.62	-3.28		
		人数	13	11	12	36	
		%	0.89	1.07	2.88	1.24	
		調整済残差	-1.70	-0.62	3.28		

表37 加齢による変化の内容と年齢階層とのクロス表(続き)

11.興奮しやすい	無	人数	1383	937	369	2689	P<.01
		%	94.66	90.79	88.70	92.44	
		調整済残差	4.56	-2.48	-3.11		
	有	人数	78	95	47	220	
		%	5.34	9.21	11.30	7.56	
		調整済残差	-4.56	2.48	3.11		
12.思い込みがある	無	人数	1440	1006	402	2848	P<.05
		%	98.56	97.48	96.63	97.90	
		調整済残差	2.49	-1.18	-1.95		
	有	人数	21	26	14	61	
		%	1.44	2.52	3.37	2.10	
		調整済残差	-2.49	1.18	1.95		
13.幻視幻聴	無	人数	1447	1016	408	2871	n.s.
		%	99.04	98.45	98.08	98.69	
		調整済残差	1.66	-0.86	-1.20		
	有	人数	14	16	8	38	
		%	0.96	1.55	1.92	1.31	
		調整済残差	-1.66	0.86	1.20		
14.しまい忘れ	無	人数	1429	989	390	2808	P<.01
		%	97.81	95.83	93.75	96.53	
		調整済残差	3.79	-1.52	-3.34		
	有	人数	32	43	26	101	
		%	2.19	4.17	6.25	3.47	
		調整済残差	-3.79	1.52	3.34		
15.病気の訴え	無	人数	1415	975	401	2791	P<.05
		%	96.85	94.48	96.39	95.94	
		調整済残差	2.49	-2.97	0.50		
	有	人数	46	57	15	118	
		%	3.15	5.52	3.61	4.06	
		調整済残差	-2.49	2.97	-0.50		
16.自傷行為	無	人数	1447	1020	414	2881	n.s.
		%	99.04	98.84	99.52	99.04	
		調整済残差	0.02	-0.82	1.09		
	有	人数	14	12	2	28	
		%	0.96	1.16	0.48	0.96	
		調整済残差	-0.02	0.82	-1.09		
17.異食行為	無	人数	1460	1025	412	2897	P<.05
		%	99.93	99.32	99.04	99.59	
		調整済残差	2.91	-1.66	-1.89		
	有	人数	1	7	4	12	
		%	0.07	0.68	0.96	0.41	
		調整済残差	-2.91	1.66	1.89		
18.常同行為	無	人数	1449	1026	412	2887	n.s.
		%	99.18	99.42	99.04	99.24	
		調整済残差	-0.41	0.81	-0.52		
	有	人数	12	6	4	22	
		%	0.82	0.58	0.96	0.76	
		調整済残差	0.41	-0.81	0.52		
19.その他	無	人数	1209	845	334	2388	n.s.
		%	82.75	81.88	80.29	82.09	
		調整済残差	0.93	-0.22	-1.04		
	有	人数	252	187	82	521	
		%	17.25	18.12	19.71	17.91	
		調整済残差	-0.93	0.22	1.04		
20.不明	無	人数	1454	1028	413	2895	n.s.
		%	99.52	99.61	99.28	99.52	
		調整済残差	0.02	0.54	-0.76		
	有	人数	7	4	3	14	
		%	0.48	0.39	0.72	0.48	
		調整済残差	-0.02	-0.54	0.76		

注) 調整済残差: 残差分析により算出した値。セル内の絶対値が1.96以上2.58未満のとき P<.05、絶対値が2.58以上のとき P<.01。なお、値が正のときはそのセルの数値が大きいことを、負のときはそのセルの数値が小さいことを意味する。